

[総合的な学習の時間]

キャリア教育で育てる自己のよりよい生き方を目指した 新たな単元開発とその有効性

— キャリア教育の視点によるマトリクス表を活用した第4学年総合「道を歩く」の実践から —

池田 利充*

1 研究の背景と主題設定の理由

平成20年度3月に公示された学習指導要領より全ての教科においてキャリア教育の推進が求められている。「キャリア教育」の必要性が提唱されたのは、平成11年12月の中央教育審議会答申である*1。また、同審議会は「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と提唱している。平成23年1月の同審議会答申では、キャリア教育の理解として「キャリア」の概念を「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と示している*2。新潟県は「郷土愛」を加えた「新潟っ子プラン」*3を基に、全教育活動をキャリアの視点で見直し自校化するよう指示している。キャリア教育には、「生きる力」を身に付けさせるという時代の要請にこたえつつ、子どもたちが力強く生きていくために必要な資質や能力を育てていくという重要な役割が期待されている*4。

三村(2005)は、キャリア教育は「領域」ではなく「機能」であると示し、キャリア教育の機能的な働きをモデルで示している(図1)。三村は図1のようにキャリア教育の4能力領域とクロスさせることで、「総合的な学習の時間(以下、総合的な学習)」を始め、全教育課程で効果的な展開を生み出す*5と述べている。キャリア教育の視点で見直した総合的な学習の授業研究は、糸魚川市立大野小学校で行われた*6。大野小では三村理論を取り入れ、培いたい力とキャリア教育の視点とをクロスさせた計画(以下、マトリクス表)を作成し、「機能」としてのキャリア教育を推進して成果を上げた。このマトリクス表を作成し、取り組んだ成果を次のように挙げている。

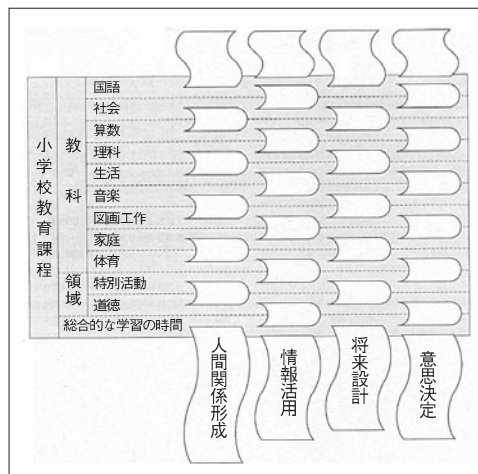


図1 教科・領域とキャリア教育の4能力領域の関係

三村隆男『はじめる小学校キャリア教育』2005 p20-21

- ① 授業のねらいをふまえたより高いねらいの設定
- ② スモールステップでの指導計画づくり
- ③ めあてを達成するための具体的な手立て
- ④ 「勤労観」を意識した活動の充実

また、先行実践として田原(2007, 2011)の実践がある。田原はこのマトリクス表を活用しての活動構成及び授業方法の成果をよりよい生き方を目指す子どもの育成に有効な1つのプログラムとし、1つの手立てであると述べている*7。

さて、目標に「生きる力」を掲げ、「探究的な学習」を通して多様な他者と協同し、自己の生き方を考える総合的な学習は、知識基盤社会を主体として生き抜く上で必須の学習である。この総合的な学習とキャリア教育の密接なつながりについては、学習指導要領解説の中でも「自己の生き方を考えることができるようにすること」とし、具体的に示されている*8。田村(2010)は「自己の生き方を考えることができるようにする」とは、人や社会及び自然とかわる中で、そこに映し出される自分に気づき、自己の生き方につなげていくこと*9と述べている。また、そのためにも日常生活や社会とのかかわりを大切にする必要性を説いている。

現任校で第4学年を2年間担当し、「道」をテーマに子どもたちの実態に応じて総合的な学習の活動を工夫してきた。1年目は国道や加賀街道、塩の道と様々な道を歩き、多面的に比較することで糸魚川の特徴やその成り立ちを考えた。

* 糸魚川市立糸魚川小学校

2年目は塩の道を海岸から長野県境まで歩き、海と山が一度に学べる糸魚川の魅力を発見した。この2年間で「道」をテーマにした学習活動の幅も広がっている。しかしその一方で、総合的な学習の醍醐味である日常生活及び社会での自分の役割や自己の生き方を考えていく活動に、なかなか至らないのが現状である。地域学習を通じて、身近な社会とのつながりに気づき、地域に主体的に参画していく「自己のよりよい生き方を考える子ども」の育成を目指したい。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究では、身近な社会とのつながりに気づき、地域に主体的に参画する子どもの姿を、自己のよりよい生き方を考える姿であるととらえ、その育成に向けキャリア教育の視点から再構成した総合的な学習の単元開発を行う。その授業実践を通して、有効性を検証する。

(2) 研究の方法

- ①小学校第4学年の総合的な学習において、これまでの活動をキャリア教育の視点から見直し、総合的な学習の中で付けたい力とクロスさせたマトリクス表を作成する。
- ②マトリクス表を基に単元開発及び年間活動計画を作成し、学習プログラム化を図る。
- ③実践を通して見られた「身近な社会とのつながりに気づき、地域に主体的に参画していく子ども」の変容を考察することにより、単元開発の有効性を検証する。

3 研究の内容

(1) キャリア教育の視点から見直す総合的な学習のマトリクス表の作成

キャリア4能力領域は、キャリア発達を目指すために必要な能力として位置付けられている能力・態度である。平成23年には「基礎的・汎用的能力」として再構成され提唱された*10。「基礎的・汎用的能力」は4つの能力によって構成される。これら能力の視点から本研究では、大野小や田原のマトリクス表をベースにした新しいマトリクス表(表1)を作成し、総合的な学習の活動の見直しと新しい単元の開発を行った。

表1 「総合的な学習の時間に付けたい力」と「キャリア教育における基礎的・汎用的能力(4能力領域)」マトリクス表

「総合的な学習の時間」で 目指す姿・付けたい力		◎活動名『道を歩く 一塩の道ガイドツアーと私たちの道ー』 ◎目指す子どもの姿			
		課題設定する力 (課題をつかむ)	課題追究する力 (価値を探る・考える)	表現する力 (価値を広げる)	振り返る力 (価値や新たな課題に気付く)
4領域 基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力	対象を知るために、何を見付けるのか。	対象とどのように関わり、どのように考え抜くのか。	考えたことを他者とどのように伝え合うのか。	対象とのかかわり、伝え合いや学び合いからどのような学びに気付くのか。
	・他者理解 (対象を知る)	・地域イベント(塩の道起点祭)に参加し、塩の道への地域の人の思いや県内外の人たちの思いをみんなで見付ける。 ・「世界ジオパーク」再認定をめぐり、今まで気付かなかった塩の道のひみつや魅力をみんなで見付け、自分たちに行きかかっていることを知る。	・海から県境まで塩の道ワークを行い、道の様子や塩を運んだガキたちの思いをみんなで見付ける。 ・道筋にあるものや道の形状等、歩いた道と比較しながら、「塩の道は〇道」とネーミングを付ける。 ・塩の道に携わる人たちの話を聞き、その思いや取組を知る。	・付箋を活用し、自分の気づきや疑問をまとめ、友だちと伝え合い、グループで話し合いながら、塩の道フィールドマップづくりを行う。 ・自分の考えと友だちの考えを比較し、次に見てきたいことや探してみたいことを伝え合う。 ・塩の道新聞、ツアーガイド、塩の道交流会、ステージ発表、ポスターセッションなど様々な表現方法を通して伝え合う。	・塩の道はもちろん、塩の道を通して糸魚川の豊かな自然や素晴らしい景観、伝統や歴史と文化、地域と地域のつながり、人々の温かさに気付く。 ・友だちと塩の道を歩き、つらくても励まし合い仲間とともに達成することの喜びや関係づくりの重要性に気付く。
	・コミュニケーション (かかわる)				
	・チームワーク (協同)				
	自己理解・自己管理能力	めあてをもち、やり遂げるために何をめあてにするのか。	めあてをもち、やり遂げるためにどのように学んでいくのか。	めあてをもち、どのように伝え合うのか。	やり遂げたことを活かし、さらに、自分がどのように行動するのか。
	・自己の役割把握 (めあてをもち)	・「世界ジオパーク」審査、再認定の年であることと知り、世界ジオパークの目的から自分で行きかかっていること、活用することをつかむ。 ・塩の道起点祭)に参加したり、ジオガイドの話を聞きながら、塩の道ガイドをするには、相手の立場を考えた企画が必要であることをつかむ。	・塩の道ガイドツアーを企画するため、ジオガイドの話を聞き、ガイドの仕方や工夫、努力を学ぶ。 ・塩の道新聞やジオパーク学習交流会、総合学習発表会で地域の方や他校・他地域に発信するために、何を伝えたいかを互いにランキング化しテーマを絞っていく。	・塩の道ガイドツアーやジオパーク学習交流会、総合学習発表会など目的や相手に応じた発表方法を選択して発信する(伝え合う)。 ※塩の道新聞、ツアーガイド、塩の道交流会、ステージ発表、ポスターセッション	・世界ジオパーク再認定に向け、自分が活動してきたことの目的や意義を再確認し、学んだことや失敗を振り返り、新たなめあてを立て、次活動や生活の中に活かす。
	・動機付け (好奇心)				
	・忍耐力 (やり遂げる)				
	課題対応能力	情報を活用し、何を見付けるのか。	目標に向かって、どのように取組むのか、どのように進めるのか。	情報をどのように整理・分析し、どのように伝え合うのか。	計画を実行し、何に気付くのか。
	・課題発見 (?を見付ける)	・塩の道ワーク後、発見や気づきを青、疑問を赤の付箋に書き込んだものをグループで話し合い、塩の道やそれにかかわる事象を調べてみたいことを見付ける。 ・塩の道が作られた目的、塩と人のつながり、私たちの生活と塩の道から広がる様々な私たちが関わることを見付ける。 ・塩の道フィールドマップ(付箋)や調査、取材活動で得た情報から、よりよい新聞作りのための必要なネタ(テーマ)を見付ける。	・ガイドのこつや大切なことを学びために、取材の準備を個別にしているがガイド班で行う。 ・ガイドツアー実行委員会を組織し、実行委員を中心に企画や内容を提案し、各クラスの意見交換しながら準備を進める。 ・ガイドツアーに向けて、ガイド班リーダーを中心にガイドツアーやガイドルートを考えてたり、現地を見学し行いリハーサルを行ったりしながら、準備を進める。	・塩の道ワーク後に記入した青の付箋(気づき)と赤の付箋(疑問)を理由付けをしなら互いに伝え合う。 ・思考ツール(クラゲチャート図やランキング化シート、イメージマップ)を活用し、根拠をもつテーマや共有したい内容を焦点化する。 ・「塩の道はどんな道?」を大テーマに個人で全体イメージマップに整理しながら、自分の気づきや学びを伝え合う。	・ガイドツアーや塩の道交流会を振り返り、目標をもってやり遂げることをよきや達成感の喜びに気付く。 ・目標を達成するために、下見やリハーサルを念入りすること、計画的な出会いと準備が必要であることを知る。
情報活用能力	計画実行・評価改善 (進めつつも、目標に向かう)				
・振り返る)					
キャリアプランニング能力	活動(働くこと)の意義をどのように設定するのか。	どのように見通しを持ち、学んでいくのか。	活動(働くこと)の意義や学んだことをどのように伝え合うのか。	これまでの学びを自分ができるように活かすのか。	
・「働くこと」の理解 (働く意義の位置付け)	・「世界ジオパーク」再認定の年であり、審査の年であることを意識し、私たちの住む糸魚川を自分たちの手で再認定させよう、自分たちができる発信活動(身近な学区の塩の道を学び、塩の道や糸魚川のよさを伝えるガイドツアー計画)を設定する。	・まずは自分たちが自分たちの住む地域(塩の道)を歩き、身近に感じられることや魅力を発見すること、よさを再発見すること、次に、塩の道や糸魚川のよさを伝える人たちに触れ、思いや考えに触れること、これまでの学びを活かし参加者の立場を考えたガイドツアーを企画する。	・企画委員やガイド班、グループなど活動形態に応じて、自己採集や振り返りの場を設定し、自分の学びや達成感、課題や失敗など自由に伝え合う。	・ガイドツアーやジオパーク学習交流会などこれまでの学びを活かし、1年間の活動の目的や意義を再確認しながら総合学習発表会で活かす。 ・地域を学ぶことが地域のよさを再確認し、私たちの生活にもつながっていることに気付く。	
・将来設計 (生き方に見通しを持つ)					

体験活動は意図的な条件設定があり、学習としての意味をもつ。田原は「よりよい生き方を考えるための体験としての条件設定をキャリア教育の視点に求め、総合的な学習の活動構成を行うことは効果的である」と述べる。マトリクス表を作成することで、キャリア教育の示す視点と総合的な学習で付けたい力との両者を満たす活動を設定していく。また、この表を作成することで体験活動にどんな意味やねらいを持たせたいかがより明確になり、ねらいに迫る具体的な手立ても作り出すことができると考えた。

(2) マトリクス表を基にした単元開発及び年間活動計画の作成

3-(1)のマトリクス表(表1)を基に1つ1つのこれまでの活動、特に体験活動の意味やねらいを再確認して修正を図り、新しい単元や活動を開発して年間活動計画の修正・改善を図った。それが図2の年間活動計画の概要図である。

図2 第4学年年間活動計画の単元名と主な活動の概要図

平成24年度 第4学年『道を歩くー糸魚川と私たちの道を探ろうー』 全70時間				
単元名	「歩こう！ジオパーク塩の道」 (25時間)	「探ろう！古道塩の道ー道の役割と糸魚川ー」 (20時間)	「探ろう！道と人、私たちとの関わりー伝えよう！塩の道ってどんな道？ー」 (15時間)	「見つめよう！糸魚川とこれからの私」 (10時間)
主な活動	・塩の道ウォーク (第1回～第4回) ・塩の道フィールドマップ作り	・調べ学習及び取材(資料収集)等 ・塩の道新聞づくり ・親子遠足 (第5回塩の道ウォーク)	・「道」の学習会 (地域ゲストティーチャー招聘) ・総合学習発表会 (ポスターセッション)	・1/2成人式実行委員会結成 ・1/2成人式 (「夢(自分の道)」発表)
修正・改善				※太字は主な体験活動を示す。
平成25年度 第4学年『道を歩くー塩の道ガイドツアーと私たちの道ー』 全70時間				
単元名	「歩こう！ジオパーク塩の道」 課題設定 (20時間)	「探ろう！塩の道ってどんな道？ー道と人と地域のつながりー」 情報収集 整理分析 (18時間)	「塩の道ガイドツアーへようこそ！ー伝えよう！「塩の道」のいろいろな顔ー」 整理分析 まとめ・表現 (17時間)	「見つめよう！これからの私の道ー10年後へ届け！メッセージー」 まとめ・表現 (15時間)
主な活動	・「世界ジオパーク」調べ ・糸魚川塩の道祭り参加 ・塩の道ウォーク (第1回～第4回) ・塩の道フィールドマップ作り	・調べ学習及び取材(資料収集)等 ★「道」の学習会 (地域ゲストティーチャー招聘) ・塩の道新聞づくり	・塩の道ガイドツアー実行委員会結成 ・ジオガイドとの情報交換 ・文化祭 (ガイドツアーCM曲発表・CM) ・秋の塩の道ガイドツアー (親子活動とのタイアップ) ・塩の道交流会(親・地域の方との交流) ・ジオパーク学習交流会(発表)	★総合学習発表会 (ポスターセッション) ・1/2成人式実行委員会結成 ・1/2成人式 (「夢(自分の道)」発表)

こうしてマトリクス表を基に修正・改善を加えた平成25年度の活動で大幅に見直しを図ったのは、探究のプロセス「課題設定」場面と「まとめ・表現」場面である。児童の活動意欲の高まりと年間を通して1つ1つの活動をつなげる明確な目的意識と意味をもたせる活動の開発ができた。特にマトリクス表(表1)中の太枠で囲んである部分を重点に、探究的な活動の中で「課題追究力」の育成と、キャリア教育の視点による「自己理解・自己管理能力」、「キャリアプランニング能力」、すなわち「身近な社会とのつながり」を考え、「地域に主体的に参画する力」を身に付ける学習活動のプログラム化が図られた。

(3) 「身近な社会とのつながり」を考え、「地域に主体的に参画する力」を身に付ける単元開発の有効性の検証

検証については、新しい活動の開発を図った「課題設定」場面と「まとめ・発信」場面に絞ることとする。また、児童の行動観察及びシート記述などを基に考察していくこととする。

「課題設定」場面では、糸魚川が「世界ジオパーク」再認定の年であることに着目し、「世界ジオパーク」の目的に目を向け、再認定のために必要なことに気付かせる。地域ではそのためにどのようなことが行われているのか、どのような人が全国から集まるのか、見て・歩いて・聞いて肌で感じる場を設定する。また、「まとめ・発信」場面では、「課題設定」場面とリンクさせた活動「秋の塩の道ガイドツアー」を企画する。1年間かけて学んできたことを地域に出て、地域のために「自分にできることは何か」を地域の方と触れ合いながら自分の言葉で伝えていく活動を設定する。

4 活動の実際

(1) 地域の実情把握と他者との触れ合いから課題をつかむ

① 「世界ジオパーク」の全容とその目的を知る

糸魚川が「世界ジオパーク」に日本で初認定され4年、今年は再認定の年であった。児童はこれまでジオパークを活用した活動をしたり、地域行事に参加したりしてきている。一方で、「世界ジオパークになって何がいいの？」の問いについては口を紡ぐ。つまり、「世界ジオパーク」そのものの価値や目的についてはほとんど知らないのが実態である。児童は自分たち自身が「世界ジオパーク」の価値や目的を知らないことが分かり、「住んでいる私たちが知らないのに他の県の人たちが知っていたら悔しいよ。」と発言した。

下調べをしてきたA児は「世界ジオパーク」は今年が再認定の年であることをみんなに伝えた。A児の発言から4年に1回の審査があり、永久に認定されることではないことにも気付いた。「ではどうしたら再認定されるのか？」という疑問も出てきた。A児の発言を通して少しずつ安定していた児童の気持ちが揺れ動くのを感じた。“来年は「世界ジオパーク」ではないかもしれない”と危機感を感じた場面であった。その後、「世界ジオパーク」は自然や文化を保存していくものではなく、活用し発信して多くの人に訪れてもらうことが、本来の目的であることを理解した。児童の中での「世界ジオパーク」の価値や目的が明確になり、「再認定に向けて自分に何ができる？」と1人ひとりが真剣に考え始めた。そして「自分たちがこれまで以上に糸魚川ジオパークの魅力を知り、たくさんの人に伝えていきたい。」と今後の活動への目的意識を高めた。「世界ジオパーク」の価値と目的を正しく理解した児童の言葉からは、教師側からの投げかけにはない主体的とも取れる活動意欲の高まりを感じた。

② ガイドへのあこがれと地域の思いに触れるー「塩の道」との出会いー

まだ、具体的な活動に至らない児童に対し、教師は表2のように投げかけて話し合いの場を設定した。児童は自分の生活する思いもよらない身近に発信すべき価値のある地域素材「塩の道」に気付いた。

次に、教師は「糸魚川塩の道祭り」のパンフレットを配付した。「歩いて見たい!」「こんな祭りあったんだ!」「どんな祭りだろう?」「明日だよ!この祭り。」と児童のつぶやきは様々であった。児童の「世界ジオパーク再認定のために」という目的意識があつてか、児童は参加計画の段取りを立て始めた。E児は「何人ぐらい参加するのかな?」「参加者はどこの人が多いんだろう?」と疑問をみんなに投げかけた。F児は「お祭りを企画している人たちは何人ぐらいだろう?」と発言した。他にもG児のように「参加する人はどんな気持ちで参加するのかな?」「塩の道のどんなところに魅力があるんだろう?」と参加者の気持ちを取材したい児童もいた。

表2 教師の問いと児童の発言・反応

T1: 「学区に日本全国に自信をもって自慢できる素材があります。その①。日本で有名なことわざがここから生まれました。」
C1: 「えっ?そんなものあるの?糸魚川だよ?」
T2: 「その②。国の大切な文化財になってます。」
C2: 「国だって。遺跡かな?ヒスイかな?」
T3: 「その③。24ジオサイト中、2つに名前が付いています。」
C3: 「どこ?どこ?」※パンフレットを確認する。
T4: 「最後は、人も動物もヒスイもそして塩もこれを使いました。」
C4: 「わからない。ヒスイって?」
C5: 「塩?私わかった。塩の道だ。」
C6: 「へー。塩の道でことわざが生まれたんだ。」
C7: 「確かに2つに名前が付いている。すごいね。」

これら発言を通じて、多くの疑問が交わされた。この話し合いの中で、児童が取材することへの迷いを生じる場面はなく、むしろ活動意識や目的意識の高まりを実感した。

塩の道祭り当日。E児とF児たちは企画側の人たちに取材を行った。G児は参加者の方に次々と取材をした。また、ジオガイドとともに道を歩き、自分の家の周りに塩の道が走っていたことに気付いたH児、休憩所であめ玉を配る「塩の道の会」の方々に興味をもったI児、先頭に立って塩を運んだポッカや塩の道の成り立ち、糸魚川の自然を自信を持って語るジオガイドにあこがれをもつK児もいた。



写真1 参加者らに取材する児童

◆G児の感想 ※一部抜粋

小雨が降っていたのに約150人の参加者がありました。遠くは東京や関西の方からも来ていました。中には何回も参加している方もいました。こんなに塩の道が知られていたなんてびっくりしました。私もたくさん歩いて身近にある塩の道の魅力を発見したいと思います。また、道を歩きながらいろんな方と触れ合う楽しさもこのイベントの魅力だと言うことを知りました。

◆K児の感想 ※一部抜粋

塩の道の魅力や糸魚川のよさを発信しようと、多くの地域の方がこのイベントにかかわっていることに気付きました。特にガイドさんはすごいと思いました。多くの質問に答え、自分で考えた言葉で塩の道のよさを伝えていました。もっと塩の道を歩いて、あんなふうになって伝えてみたいです。

(2) 地域貢献「自分にできること」から自己のよりよい生き方を考える 一秋の塩の道ガイドツアーへの道一

1学期の塩の道を歩く体験を通し、何度となく対象とかかわって取材や調査を重ねることで、「地域の方に塩の道の魅力や糸魚川のよさを伝えたい。」という思いを強くしていた。

そこで児童らと「ガイドツアー実行委員会」を結成した。実行委員を活動の中心に据え、各クラスでのアイデアを実行委員を通して検討し、決まったことを各クラスで役割分担し、段取りを進める体制を整えた。実行委員会及びガイドツアー実施までの主な活動の流れは右の表3の通りである。1人ひとりが勤労観をもち、「自分にできること」から「みんなでできること」へと、児童が学んだことを主体的に地域へ還元していくことをねらいとした。

実行委員のL児は「参加した皆さんに記念や思い出に残る楽しいツアーにしてもらいたい。」とスタンプラリーを提案した。L児のアイデアを基に、どの地点にどのようなもの置くのか、各クラスからのアイデアをもらい、実行委員で検討し準備を進めた。みんなで塩やボッカ、牛、地藏、豊かな自然…などを手分けしてデザインし、彫刻刀でゴム版を彫りスタンプを完成させた。また、L児は集めてきたパンフレットを参考に完歩賞を作成し、スタンプラリーに活かすことを提案した。参加者の立場を大切に活動であった。M児は、ゲストから「聞く側の立場に立ってどのような話をしたらよいか、どのような話題に関心をもったかを考えながらガイドしなければいけない。」とガイドのコツを教えてもらった。自分の話したいことばかりガイドシナリオに書いていたM児は、参加してくれる保護者に事前調査を試みようとして計画を立て始めた。N児は、塩の道交流会の準備で「俳句会」を提案した。N児は班の仲間に「塩の道を歩き、糸魚川の自然や風景なども見てもらうのだから。」とその場で俳句を書き、発表しながら感想を交流し合うことのよさを伝えた。

ツアー当日は、実行委員を中心に1人ひとりがこれまで学んだこと、見付けた塩の道や糸魚川の魅力を自分の言葉で伝えようとする姿が見られた。ツアー参加者の方々を気遣い、おもてなしの心をもち、自分にできることを主体的に取り組んでいた。「世界ジオパーク」の目的と再認定に向け、具体的な実践活動が児童らの心を1つにすることができた。

◆L児の感想 ※一部抜粋

スタンプのデザインを一生懸命に考え、丁寧に彫ってツアーに出したらお客さんが喜んでくれました。途中全員で「CM曲」と「もみじ」を歌って歩きました。一緒に歌うと、お客さんものつてくれました。時間を惜しんで企画して取り組んでよかったです。やりがいもありました。

◆M児の感想 ※一部抜粋

自分も楽しくガイドをすると、自然と緊張せずに伝えることができました。長い坂道では、参加者が退屈していたので自己流のクイズを出すと答えてくれました。とてもうれしかったです。ガイドの準備やガイドをしながら、わかったことがたくさんありました。めあて達成です。

表3 塩の道ガイドツアーまでの活動の流れ

実行委員での仕事	クラスでの活動	ガイド班での活動
・ガイドツアー実行委員会結成	・ガイドツアー実行委員選出	
・ガイドツアールート決定	・ガイド班決定	・ガイド旗(のぼり)作成
・ガイドツアーCM曲づくり(歌詞募集)	・ガイドツアーCM曲づくり (歌詞検討)	・ガイド地点とガイド分担決定
・ガイドツアーCM曲提案・決定		
・ジオガイドさんの情報交換会(塩の道や糸魚川の魅力・ガイドのコツ・心構えを取材)		
・ガイドツアー横断幕づくり	・ガイドツアーCM曲練習 (楽器・歌・ダンス)	・ガイドシナリオづくり
・パンフレットづくり(デザイン)		
・文化祭「わかばコンサート」でのガイドツアーCM曲発表と宣伝		
・参加申し込み集約	・パンフレットづくり	・ガイド道具等の準備
・完歩賞づくり	・ガイド証づくり	・ガイドルート下見(リハ2回)
・スタンプラリー企画(スタンプづくり)	・参加賞(手形しおり)づくり	・塩の道交流会での出し物決定・準備
・開会式・閉会式準備		

※太枠は主に学年全体での活動を示す。



写真2 手作りスタンプ 写真3 塩の道ガイドツアーの様子

5 考察

(1) 地域の実情把握と他者との触れ合いから課題をつかむ一「課題設定」場面一

本活動では、導入に「世界ジオパーク」の活動を取り入れた。A児に挙げるように「世界ジオパーク再認定の年」という地域の実情をいち早くとらえることになったこの活動設定は、K児の感想のように地域課題をとらえ、次活動「塩の道ウォーク」の目的やねらいを明確にした。この「塩の道ウォーク」も課題をもって取り組む主体的な活動になった。後の「塩の道ガイドツアー」での1人ひとりの役割の理解、相手意識の高まりを考えると、この課題設定場面の活動は、基礎的・汎用的能力(自己理解・自己管理能力)の視点から年間を通してやり遂げる有効な活動であった。

また、G児の感想のように「塩の道祭り」での取材を通して、塩の道や糸魚川に対する地域の思いを受け止め、県内外からの参加者の塩の道や糸魚川への注目度を理解することで、課題設定がさらに強化された。さらに、塩の道を歩きながら多くの方とかかわることで他者を理解し、「私たちに何ができるか?」と気持ちを揺り動かす自己のよりよい生き方を目指す活動になった。

(2) 地域貢献「自分にできること」から自己のよりよい生き方を考える一「まとめ・発信」場面一

再認定に向け、実行委員会を中心にツアーの企画を進めてきた。O児のように地元ガイドからの指南に後押しされ、

地域に果たす役割意識もより高まり、ツアーに向けて主体的に計画的な段取りを踏む児童の姿が見られた。塩の道祭りに参加した時の参加者の思いを想像しながら、実行委員会、ガイド班それぞれアイデアを出し合って準備を進めた。N児のガイド班が企画した「俳句会」は実際に好評で、児童と参加者が交互に詠み合い笑い声が絶えなかった。

ガイドツアーに参加した方々からは、「すべてが手作りのガイドツアーには感心した。」「語りかけるような優しい案内と説明に心が和み、楽しかった。」「糸魚川に住んで10年になるが初めて知ったことばかりで、新鮮な気持ちになった。」「県外の友人が遊びに来た際には糸魚川の魅力として教えてあげたい。」とコメントをいただき、児童らは大きな達成感とともに、改めて自分たちにできることや、地域のためにできたことを実感した。1人ひとりが再認定に向けた使命感をもち、他者評価もあって地域とのつながりを感じながらの活動への充実度も大きかった。キャリア教育の視点である働くことへの理解や将来設計といったキャリアプランニング能力も育まれてきたと判断できる。「私たちもガイドしてみたい。」という声に始まり、「まとめ・発信」段階をガイドツアーという実践的活動としてできたことは、一段上の段階の発信活動として工夫することができたと言える。

◆O児の感想 ※「ガイドとの情報交換会」より一部抜粋
わたしが学んだことは、たくさんあります。特にガイドをするときには下見をし、自分の頭の中で物語を作って自分の言葉で説明するとよいコツを学びました。ツアーでは「楽しかった」「勉強になった」と思ってもらえるツアーにしたいです。



写真4 ジョガイドにコツを学ぶ

6 まとめ

(1) 成果

マトリクス表を基に、これまでの総合的な学習の活動をキャリア教育の視点で見直した単元開発と学習プログラムの作成は、自己のよりよい生き方を目指す子どもの育成に有効な手立ての1つである。それは主に次の4点からなる子どもの姿が見られたからである。

- ① 児童自ら、活動のねらいを明確にし、その意味を考える姿が見られた。
- ② 地域の実情をとらえ、「自分に何ができるか?」と問う姿が見られた。
- ③ 対象とのかかわりを通して、地域とのつながりを考え、地域に主体的に参画する姿が見られた。
- ④ 地域の魅力やよさを自分の言葉で伝え、地域の一員として果たす役割を実感する姿が見られた。

本実践を通し、探究的な活動の中で「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく姿」も見取ることができたことは大きい。キャリア教育の視点で総合的な学習を再構成することで「よりよい生き方考える」充実した学習プログラムを開発することができた。教師にとってもマトリクス表を基に、付けた力のために何をどのようにすればよいのか、見通しをもって活動を設定して指導することができた。

(2) 今後の課題と方向性

本実践での有効性の検証については、児童の姿を見取り、シート記述を基に考察しながら、単元開発及び学習プログラムの有効性を検証した。数値的な検証には至っていないため、客観的な検証には課題が残る。単元ごとの定期的な数値的データの必要性も感じた。

今後は、キャリア教育の視点から総合的な学習の単元開発やプログラム化を継続し、実践を積み重ねてさらにその有効性を検証していきたい。そして、社会や地域の中で自分のよりよい生き方考える子どもたちの育成に向け、今後も単元や学習プログラムの工夫を図っていきたい。

引用文献・参考文献

- *1 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」平成11年
- *2 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」平成23年
- *3 新潟県教育委員会・新潟県キャリア教育パイロット事業協力者会議「新潟っ子をはぐくむキャリア教育のすすめ」平成23年
- *4 文部科学省『小学校キャリア教育の手引き(改訂版)』平成23年
- *5 三村隆男『はじめる小学校キャリア教育』実業之日本社 2005 p.20-21
- *6 大野小学校研究集録「自ら学び、すすんで他とかかわりながらよりよく生きようとする子どもの育成ーキャリア教育の視点から取り組む教育活動の推進ー」平成18年～平成20年
- *7 田原早苗「よりよい生き方を目指す子どもが育てるキャリア教育ーキャリア教育の視点から見つめ直す総合的な学習の時間ー」『教育実践研究(第17集)』2007, pp.169-174及び「生き方の自覚を深め、よりよい生き方を目指す道徳の時間のプログラム構成と実践ー道徳教育・キャリア教育の連携からのアプローチー」『教育実践研究(第21集)』2011, pp.215-220
- *8 文部科学省『小学校学習指導要領解説(総合的な学習の時間編)』平成20年 p.20
- *9 田村 学・原田信之編『リニューアル総合的な学習の時間』北大路書房 2010 p.5-6
- *10 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」平成23年